

報 告

フィンランド・ドイツにおける男女平等教育、性教育に関する調査報告

橋本紀子

はじめに

2003 年 9 月のフィンランド調査では、ヘルシンキ市の中学校の参観と同時に、子どもたちの放課後の生活を支える地域の諸施設（セクシュアル・クリニックも含めて）を視察した。今回は、日本国内の男女平等教育の実態調査を進めている科学研究費グループのメンバーと合同でフィンランド、ドイツ調査を行った。フィンランドでは国立教育局健康教育課で、健康教育と性教育に関する国の方針、カリキュラムの大枠を伺い、関連する教科書等の入手につとめた。ドイツの訪問先は千葉大学の佐藤和夫氏のアレンジによる。

また、ヘルシンキ大学教育学部教授エリナ・ラヘルマ氏のグループとの研究交流のために、科学研究費による福島県と大阪府の共学、別学別高校生の生徒文化と生活意識に関する調査の中間報告書を作成し、事前に添付ファイルで送ったが、ラヘルマからも事前に彼らの最新の論文ファイルが 4 本送られてきた。そのため、当日の意見交流は、両者にとって有意義なものとなった。

I. 調査目的と期間

- 目的：1. エリナ・ラッヘルマの「ジェンダーと教育」研究会メンバーとの研究交流
2. ヘルシンキ郊外の中学、高校の視察と資料収集
3. 「女の子の家」とフィンランド・エイズ・カウンシルの視察
4. フィンランド国立教育局健康教育課でのヒヤリング

5. フィンランドの健康教育、性教育関連図書、資料の収集
6. ドイツ、ライプチヒ市の中学、高校の視察
7. ライプチヒ市男女平等政策課でのヒヤリング
8. ベルリン市の非暴力プロジェクトに関するヒヤリング

期間：2005 年 8 月 31 日～9 月 12 日

II. 調査活動、資料収集内容

1. 訪問先と対応者、そこでの活動概要

詳しくは別紙①を参照

2. 収集した資料・教材等について

詳しくは別紙②を参照

3. 新しく得た知見と当面の課題

フィンランドでは、ヘルシンキ郊外ツウスラ市の中学、高校併設校を視察し、同校の生物、健康教育の教員、スクール・ナース、スクール・カウンセラーと懇談した。そこで、性教育が全校的にどのような形で行なわれているかを教科書も含めて具体的に知ることが出来た。また、国立教育局健康教育課でのヒヤリングによって、カリキュラム作成過程の特徴や内容上のポイントなどを知りえた。これらに関しては、すでに別紙③の形でまとめたので参照のこと。今後の課題としては、収集してきた教科書の分析と、フィンランドエイズ・カウンシルと「女の子の家」での情報、資料の整理がある。

ドイツでは、旧東ドイツにあったライプ

チヒのトーマス校を視察し、授業参観のほかには高校生との懇談がもてたので、日本とも、フィンランドとも異なる文化の下での子どもたちの様子や、性教育、男女共学の受け止め方などを知った。同市の男女平等政策課の話で、東西ドイツの統一の経過にはさまざまな問題があることがわかった（統一は正しかったが統一の仕方はまずかったと言っていたのが、印象的）。

ベルリンの非暴力プロジェクト担当者によれば、西ドイツ側では、家庭内暴力だけではなく、校内暴力也多発しており、東側

から転勤してきた教師はその事実にはショックを受けると言っていた。ここには、失業率の高さや、貧富の格差、学校制度の問題等があるということであった。男女平等の前提条件である多様な人間存在の承認という点で、政策的にも多くの課題を抱えているということがわかった。ここで得た、情報や資料の整理と日本の現状との比較、分析が当面の課題である。

以上

別紙①

月日	会った人	訪問先	内容
9/1 (木)	Elina Lahelma Tuula Gordon Anna Kuuteri Sirpa Lappalainen 他 3 人	ヘルシンキ大学教育学部，行動科学部門の会議室	ラッヘルマ教授の主催する研究会メンバーとの研究交流，日本側からは 8 人が参加し，関西，東北の高校生の生活文化と意識に関する調査の中間報告を行う。
9/2 (金)	Riitta Eeroheimo Iikka Makinen その他，生物，保健科教員，スクール・ナース，スクール・カウンセラー	Tuusula 市の HYRYLAN 中学，高校	高校の校長，副校長を始め，性教育，男女平等教育関連の教員との懇談（カリキュラム，教科書，教育方法等）。国語，英語，生物，数学，思索科等の参観。給食体験。
9/5 (月)	Mari Uusitalo Susanna Ruuhilahti Miia Hanninen	ヘルシンキ市の 女の子の家 フィンランド・エイズ・カウンスル	心理学者の所長と，各学校への性教育巡回講座を行なっている助産師にヒヤリング。 同性愛者の団体を基盤に創設された等，活動内容を聞く
9/6 (火)	Heidi Peltonen Elina Haavio-Mannila Anna Rotkirch	フィンランド国立教育局健康課 マンニラ先生の家	同国の健康教育方針や性教育について，カリキュラム作成過程も含めて伺う。 来年度翻訳予定の『20 世紀の性生活』の著者等との懇談
9/8 (木)	Kathrin Sohre	ライプチヒ市男女平等政策課	前日，ヘルシンキからベルリンへ移動。朝，ライプチヒへ。 同市の男女平等政策全般と教育分野の取り組みを聞く。女子への職業教育を重視し，“女の子の日”を設けている
9/9 (金)	Thomas 校 校長 ラテン語の教員，教育実習生，生徒会担当教員 2 人，高校生 4 人（男子 3，女子 1）。 Margot Wichniarz	ライプチヒ市のトーマス校（小学校から高校まで併設）。 ベルリン，青少年センターのような事務所で	トーマス教会少年合唱団員*のクラス（中学 1 年）で，ラテン語の授業を参観。その後，高校生（1～2 年生）4 人と懇談。各人が自分の意見を明確に述べ，自由で解放的。 ベルリン市の暴力防止活動について聞く。

* 前夜，ゲヴァントハウスで行なわれたコンサートに出ていた子どもたちのクラス，5 年生からラテン語は必修。現在は女子もラテン語を選択できる。

別紙②

収集した文献, 資料

1. “ “Straight people don't tell, do they....? ” Negotiating the boundaries of sexuality and gender at work “ Edited by Jukka Lehtonen and Kati Mustola, Ministry of Labour Finland(ラヘルマ等との研究会でユッカさんにもらう) 2005.9.1
2. ” Democratic Education Ethnographic Challenges “ Edited by Dennis Beach, Tuula Gordon, Elina Lahelma The Tufnell press (同上研究会でラヘルマより)
3. ” Imaging Gendered Adulthood Anxiety, Ambivalence, Avoidance and Anticipation” By Tuula Gordon, Janet Holland, Elina Lahelma, Rache Thomson(同上研究会でゴードンより入手の論文)
4. ” who wants to be a woman? Young women's reflections on transitions to adulthood “ By Tuula Gordon and Elina Lahelma (同上)
5. ” Lukio 3 Koulun Biologia ihmisen “ By Johan Tast , Heikki Tyrvaainen, Teuvo Nyberg, Matti Leinonen Otava (アカデミネン書店で購入) 2005.9.2
6. ” Lukion terveystieto OTE “ By Sami Kalaja, Riina Lansikallio, Jukka Porevirta, Seija Tanhuanpaa Otava (同上)
7. ” Kunnon Kirja Terveysten perusteet “ By Litmanen, Pesonen, Renfors, Ryhanen Wsoy (同上)
8. ” Kunnon Kirja Nuoret, terveys ja arkielama “ By Litmanen, Pesonen, Renfors, Ryhanen Wsoy (同上)
9. ” Terveystietoa luokille 7-9 Terveysten portaat “ Otava (オタヴァ出版社で購入) 2005.9.6
10. “ Terveystieto tutuksi: ensiapua terveystiedon opettamiseen “ By Heidi Peltonen Lasse Kannas (toim.) (国立教育局でペルトネンさんより入手) 2005.9.6
11. “ HEALTH EDUCATION “ By Heidi Peltonen (同上氏より入手の論文)
12. “ National Core Curriculum for Basic Education 2004 Chapter 7. Learning objectives and core contents of education “ (同上)
13. “ The Finnish Curriculum Development Processes Finland in PISA studies – Reasons behind the Results “ (同上)
14. “ National Core Curriculum for Basic Education 2004 “ Finnish National Board of Education. (国立教育局の購買部で購入) 2005.9.6
15. “ National Core Curriculum for Upper Secondary schools 2003 “ Finnish National Board of Education. (同上) 2005.9.6
16. “ Social and Health Care Services Quality Standards and Criteria in the Education of Practical Nurses To serve as support material for self-assessment “ Evaluation 9/2000 National Board of Education. (同上)
17. “ Student Assessment Guide for Vocational Education and Training “ Edited by Elisabet Kinnunen & Tiina Halmevu National Board of Education. (購買部で入手)
18. 2005.9.5 に “女の子の家” で, 宣伝用パンフレット 7 冊とカレンダー 1 つを入手。

19. 2005.9.5 に フィンランド・エイズ・カウンスルで宣伝用パンフレット, 絵葉書, パッケージ多数入手。

20. “ Gender and Excellence in the Making “ European Communities, 2004.

(エリナ・ハーヴィオーマンニラ氏の家で Jeff Hearn より入手) 2005.9.6

21. “en mene muh....” Soziales in Madchen·und Jungenstuden

By LISUM 2000 (ベルリン市非暴力プロジェクトのマルグリットさんより入手)

2005.9.9.

以上

はじめに

フィンランドの教育は、人々の平等を促進することを目的のひとつにしています。そのため、カリキュラムの編成原理として、階層、ジェンダー、地域間の平等をいかに確保するかが強調されてきました。しかし、ヘルシンキと北部フィンランド、その他地域での子どもたちの学力格差は依然としてあり、これらを是正することなどをめざして、2003年に16歳からの普通高校（ルキオ）の、2004年に7歳から16歳までの義務教育である総合制学校（多くは15歳で卒業するが16歳まで在学できる）の新しい「カリキュラム編成」（カリキュラム・フレームワーク）が制定されました。1998年の基礎教育法に基づく今回のそれには国家基準の強化や指導と援助の強化、新しい授業時間の配分、異なったレベルや活動間の積極的な連携の強調などがみられます。

フィンランドの性教育の特徴は、学校だけではなく地域でも子どものセクシュアリティの発達を援助する施設を整備しようとしていることにありますが¹⁾、ここでは、学校教育を中心に見ていくことにしたいと思います。

1. 「カリキュラム編成」にみられる性教育の取り扱われ方

（1）カリキュラム作成過程上の特徴

2003年と2004年の改定では、国家主導の側面は強化されましたが、94年段階で行なわれた、地方行政と各学校への大幅な権限委譲は引き継がれ、カリキュラムの作成に関しても地方行政や学校、教師、親たちとの相互協力による作成過程が重視されています。健康教育（保健）や学生の福利厚生に関しては、社会、保健省系列の関係部署との連携がとられているとのこと²⁾。たとえば、国立教育局（国家教育委員会）で、「カリキュラム編成」を作成するときにも、相互の意見交換はなされており、それは、地方行政段階でも、各学校段階でも行なわれています。地方段階では、その地域の保健センターやパブリック・ナースと、各学校では関連教科担当教員の他にスクール・ナースやスクール・カウンセラー、または親の意見なども反映させながら、カリキュラムは作成されています。この作成過程が実際に出来上がったもの以上に、学校改革の中心的な役割を果たすと言われています。

（2）総合制学校のカリキュラムにおける健康教育と性教育

上で述べた国立教育局作成の「カリキュラム編成」では、1・4学年（7歳～10歳）の健康教育は環境や自然科学の科目と統合して行なわれ、5・6学年でもそれは自然科学の科目群と結合して取り扱われます。独立した科目となるのは、日本の中学校にあたる7・9学年になってからです。性教育との関連では、1・4学年の環境と自然科学の領域の”個人と健康”のところで人間の成長や発達と多様な段階について、また、人体の最も重要な部分の名前や主な機能について説明できることが期待されています³⁾。さらに、5・6学年の生物と地理で、生徒は人体の構造や生命のしくみ、各人の成長や発達過程についての認識、思春期の特徴や人間の性の理解が期待されています。それと同時に、成長、発達に関連する課題や、人間の多様性と社会との相互作用に関連する課題の検討、他の人への配慮と自分自身の行動に対する責任を予測することも期待されています。6学年の終わりまでには、自分自身の第2次性徴を自覚化し、感情の表現と抑制の方法を学び、他の人々の視点から物事を検討する、自分たちの年齢にふさわしい

権利と責任について意識することなどが期待されています。

7・9 学年の健康教育は主に 4 領域に分けられますが、その一つの「成長と発達」の内容には、青年期の特徴的な発達と要求として、セクシュアリティの発達が、「日常の健康」のところでは、性的健康として、人間関係、セクシュアリティ、性行動とこれに関連した価値や規範が学習内容としてあげられ、「健康、社会と文化」のところでは、基本的な健康管理と福祉サービス、NGO の活動などがあげられています。

性の生理学的側面に関しては、7・9 学年の生物の主な内容 4 領域中の「人間」のところで、人間のセクシュアリティや生殖、人間性の発達における遺伝と環境の重要性などがあげられています。この箇所に関する 8 学年時の最終評価の基準にも、“セクシュアリティの多様な現れ方を説明する”や“生殖細胞、性交、受精、妊娠経過、誕生などを普通の言葉で説明する”が、あげられています。この他、教科を超えた教育内容を取り扱う「統合的、横断的カリキュラム主題」の最初に、「人間としての成長」があげられていますので、生徒集会やクラス集会などの場でも性教育は行われます。

（3）普通高校のカリキュラムにおける健康教育と性教育

普通高校（ルキオ）の生物は 5 分野に分かれています。そのひとつが人間生物学です。これは、6 領域に分かれており、その中の「人間の生殖」のところで、性的発達とセクシュアリティ、受精、妊娠、分娩が取り上げられ、「人間のライフサイクルと社会的本質」のところで社会的側面について取り上げられています。

健康教育では必修コースの内容の一つに、性的健康、カップルの関係、前の世代の家族と社会の遺産についての学習があげられ、特別コースの内容には、親になることや家庭生活のための準備、身体的、精神的な安全と暴力のない交際などがあげられています。このようなカリキュラムの大枠は各学校では実際、どのように具体化されているのでしょうか。

2. 中学、高校における性教育の実践

2005 年 9 月 2 日に、ヘルシンキ市郊外ツースラ市の中学校を併設したヒュリュレン高校を視察しました。ここは、13 歳から 18 歳の子どもたちの学校で校長は中学、高校に 1 人ずつ 2 人、副校長は両方合わせて 1 人という組み合わせでした。最初に行なわれた、先生方との懇談には、生物の先生や健康教育の先生、スクール・ナースなども同席して同校の性教育についての紹介がなされました。それによると、同校にはスクール・ナースとスクールカウンセラーがおり、中学校の性教育は、生物などで行なわれている他に第 9 学年で週 1 時間の授業をしています。そこでは、妊娠、性感染症なども取り上げられ、安全のためのコンドーム使用についても教えられています。1 クラスは 20 名ぐらいで、ワークショップやゲームによるグループ学習などを行っています。男子はまだ、子どもだが、女子は成熟していて議論を好み、グループ討論のときには、男女一緒のグループより同性のグループの方が多いということです。討論のテーマには、暴力の問題や性的マイノリティの問題等もとりあげられます。高校では、高 1（16 歳）の健康教育で性教育も扱っていますが、性的なトピックス、たとえば、同性愛やトランス・セクシュアルの問題、露出狂、サゾ、マゾなどのような多様な性表現をテーマにした討論などがしばしば、行なわれます。同性愛の学習の時には、同年代のゲストスピーカーを招いて、その人の日常を語ってもらうこともあるというように、生徒たちがより、身近にその問題を理解できるような工夫がなされています。

副校長の話では、この学校では、中学、高校合わせて年間 1 人～2 人しか、妊娠しないし、

中絶もしないということです。生徒の多くは性交後 24 時間以内にピルを飲めば、避妊できるということを知っているし、薬局でピルは簡単に買えるということでした。この懇談の席上、同校で使用している健康教育と生物の教科書の紹介がありましたが、その特徴に関して気付いたことは、まず、ルキオでは高校の生物の中に、人間生物学という分野があり、これが 1 冊の教科書になっていたこと、健康教育のなかでは、性的健康とセクシュアリティの発達を取り上げられ、性に関する現代的トピックスが討論素材として載せられていたことなどです。同校のカリキュラムをみますと、高校では、生物の他に健康教育も教科としてありますが、中学校ではまだ、健康教育という独立の科目は無いので、性に関する教育は生物の時間、選択科目の時間、ホームルームなどで行なわれていると思われます。

おわりに

最後に、今回訪問した中から地域での取り組みについて少し述べておきましょう。一つは、同性愛者の団体を基に作られたフィンランド・エイズ・カウンシルです。ここは、ユニセフなどの資金援助をもとに活動を進めているまだ、弱小の団体なので、若者にターゲットをしぼり、若者が多く使用するインターネットを利用してエイズ予防の情報を流す、若者の集まる場所にエイズ予防ポスターを貼る、パンフレットやコンドームの入ったパッケージを配るなどの活動を行なっています。さらに、伝統的な教会による 15 歳時の堅信式（キリスト教信者としての信仰告白、確認の式）のキャンプにも出向き、相談用テントを設けるなど、多様な機会を利用して活動を展開しています。この堅信式の利用は国立教育局でも耳にしましたが、社会を支える多様なシステムのひとつとして新旧の制度（国民の 90 数％がルーテル福音教会信者）が連携しているのです。また、前回に引き続いて訪問した‘女の子の家’の助産師さんは、現在、申し込みをしてきた学校への性教育連続 10 回講座の出前講義を行なっているということでした。今回は、学校教育に焦点をあてましたが、このような、地域の取り組みもこの国の性教育を支えているのです。そして、カリキュラムの作成過程にこれらが反映する可能性が開かれていることも、今、日本で最も参考にしたい点です。

注：

- 1) 橋本紀子「フィンランドの性教育—社会全体で性的自立を支援する」『季刊セクシュアリティ』16 号、エイデル研究所、2004 年 4 月参照
- 2) 2005 年 9 月 6 日に国立教育局で Heidi Peltonen にインタビュー
- 3) 具体的な部位はあげていないが、テキスト等には生殖器も含まれている